



# 浦添市の歴史散歩

## 琉球王統、最古の王統伝説、発祥の地、 浦添城跡（うらそえじょうあと）

初期琉球王国の歴史・文化を理解する上で重要なグスク（城）であるとして、国の史跡に指定されていますが、未調査の部分が多く、現在も発掘が進められています。近年、調査によって明らかになった一部城壁が復元整備され、調査と復元が進められています。

浦添城跡は、琉球石灰岩の丘陵地にあり、東中国海を展望することができ、立地の良さからみても古琉球時代の要所として栄えたことが分かります。



**⑤浦添城跡展望**  
浦添城の正殿の石敷きと思われる付近の東屋から見る風景は、宜野湾市、嘉手納町、読谷村、遥か東シナ海が見渡せる風光明媚な場所です。

ワカリジ（為朝岩）

**⑥浦添の前の碑**

**④ディークガマ**  
1597年尚寧（しょうねい）王時代に、首里から浦添城までの道路を整備した際の竣工記念碑です。現在の石碑は沖縄戦で破壊されたため、1999年に復元されました。表には琉球かな文字、裏は漢文で「尚寧王の命令で国民が力を合わせて、岩を刻み、道を作り石を敷き、川には虹のような橋をかけた」と記されています。石碑上部には、国王を表す太陽、優れた王だったことを示す鳳凰、琉球が豊かな土地だったことを意味する流雲がレリーフとして刻まれているのも特徴です。また石碑の前の大きな石は馬ヌイ石と呼ばれ、浦添城に来た際にの馬の乗り降りため踏み台として使われていたそうです。

**⑦石畳道**

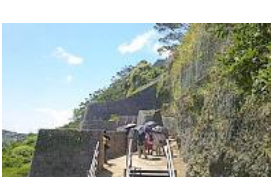
1597年尚寧（しょうねい）王時代に、首里から浦添城までの道路を整備した石畳道です、安波茶橋付近の石畳道の復元されています。

**①浦添グスク・ようどれ館**



古写真や発掘調査成果のパネル、出土遺物などから、浦添グスクと浦添ようどれの歴史が分かりやすく学べます。実物大で再現された浦添ようどれの西室（英祖王陵）は必見です。

**②浦添ようどれ**



浦添城跡の北崖中腹に初期琉球王国中山王陵（ちゅうざんおうりょう）・「浦添ようどれ」があります。「ようどれ」とは夕凧（ゆうなぎ）を指す琉球語と伝えられていますが、極楽を意味するとも考えられています。  
浦添ようどれは、英祖（えいぞ）王陵と尚寧（しょうねい）王陵の墓室があり、向かって右が英祖王一族、左が尚寧王一族の墓室と伝えられています。

**③伊波普猷（いは ふゆう）の墓**



伊波普猷（1876～1947年）は、語学学者金田一京、日本民俗学の創始者である柳田国男や折口信夫とも親交が深かった沖縄研究の第一人者です。郷土を慈しみ深く広く研究して沖縄学という分野を生み出した「沖縄学の父」といわれる伊波普猷は、琉球の歴史が刻まれた浦添城跡の隣接地のこの霊園に静かに眠っています。

**⑦石畳**



浦添城跡にある御嶽。戦時中は住民の避難壕として使われた。中に入ることはできませんが覗くことができます。かつてはここに浦添で亡くなった5000人もの遺骨が納められていた。現在は平和祈念公園に合祀されています。大きなデイコ（ディーク）の木があることからこの名が付けられました。

ガイドのご用命は

お問合せ:「うらそい歴史ガイド友の会」時間:9:00～17:00(休:月曜・12/28～1/3)TEL:098-874-9345